

第1章 戦場

軍隊の生活

薬も食料も武器もない終戦前の軍隊

あだちかずのり
足立憲紀さんのお話から

○徴兵検査 兵隊にふさわしい性質や才能などを判定するために身体や身上を検査すること。

○赤紙 人を軍隊に呼び集める命令書。赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

○三八銃 三八式歩兵銃または三八式銃は、明治三十八（一九〇五）年に大日本帝国陸軍が採用した小銃。

○日露戦争 一九〇四～〇五年、日本と帝政ロシアとが満州・朝鮮の制覇を争った戦争。

○下士官 士官・准士官と兵の間に位する武官。

○将校 位が少尉以上の軍人。軍隊において、戦闘の指揮をする士官。

昔は、満二十歳になると、日本全国の男性には兵隊になるための徴兵検査がありました。法律で決まっていたのです。私も検査を受けて甲種合格しました。甲種合格したら、みんな二年間軍隊に行くのです。そしていざというときには赤紙が来て、何があってもお国のためにと戦争に行かなければなりません。甲種に合格した人は、最も身体が丈夫で健康ということなので、何となく誇らしく、自分から戦争に行こう、お国のために命を捧げようという気持ちになったと思います。

私は、昭和十五（一九四〇）年八月に月寒歩兵二十五連隊に入りました。入隊して一か月は「おいちに、おいちに」と声を上げて鉄砲を担いで訓練をしました。三八式歩兵銃という銃は、錆びさせたら大変です。兵隊は赤紙を出すと全国からどんどん集まるけれど、鉄砲は簡単に手に入りません。人間より兵器のほうが大事なのかと、私たちは悪口を言ったものです。三八式というのは、明治三十八年に初めて作られたということ、つまり、日露戦争のときの鉄砲をいまだに私たちが担いでいたのです。

一か月訓練し、衛生兵として月寒の陸軍病院に行きました。衛生兵は衛生隊に所属し、病院の看護士に当たります。下士官は婦長さんクラスのベテランで、医者にあたるのは軍医で将校です。今度は医学の勉強をしました。人体の構造、骨組み、筋肉がどうだとか、そういう勉強が始まりました。

昭和十六（一九四一）年の太平洋戦争開戦のことははっきりと覚えています。「始まったな、召

○支那事変 昭和十二（一九三七）年から昭和二十年の間、日本と中華民國との間で行われた日中戦争に対する当時の日本の呼び方。

○真珠湾 ハワイ、オアフ島南岸のアメリカ海軍根拠地。昭和十六（一九四一）年十二月七日（日本時間の八日未明）日本海軍が奇襲し、太平洋戦争が勃発した。

○憲兵 旧日本陸軍で、軍事警察をつかさどった兵科。また、それに属した兵。

○特高 特別高等警察の略称。旧制で、思想犯罪に対処するための警察。

○共産主義 私有財産制を否定し、生産手段や生産物を全て共有することによって貧富の差のない社会を築こうとする思想・運動。

集だな」と思いました。あまり抵抗感はなかったですね。支那事変からずっと戦争が続いて、しかも都合のいい話ばかり聞いていましたから。いよいよ始まるのだと。日本は「真珠湾で、あのアメリカをやったのだ！」と、国民の気持ちをあおっていますのでね。

分かっていている人は分かっていたのでしようけれども、口には出せません。憲兵などが相当厳しく目を光らせて、警察にも特高というのがありましたが、察の制服ではなく、普通の姿で民間の中に入って行って、例えば共産主義の本を持っているだけで連れていかれることもあったそうです。

昭和十八（一九四三）年の五月に赤紙が来しました。今度は、旭川の第七師団に配属されました。七師団と言わずに熊部隊と言っていました。配属されると、五月なのに立派な冬用のいい軍服を着せられました。そして、いつまでたっても脱がせてくれないのです。大きな倉庫があるので中へ入ってみたら、縄ばしごや、「もっこ」という背負って歩く道具とか、登山に行くようなものばかりがびっしりあるのです。それで、千島に連れていかれるのだなど思ったのですが、米軍との闘いでアツツは玉砕してキスカは奪回されて、日本が作戦を変えたために我々は助かったのです。

衛生隊は、一つの隊は私たちのような男の看護士と医者ですが、残りは担架隊といって、担架を持ち運んで走



行進の訓練

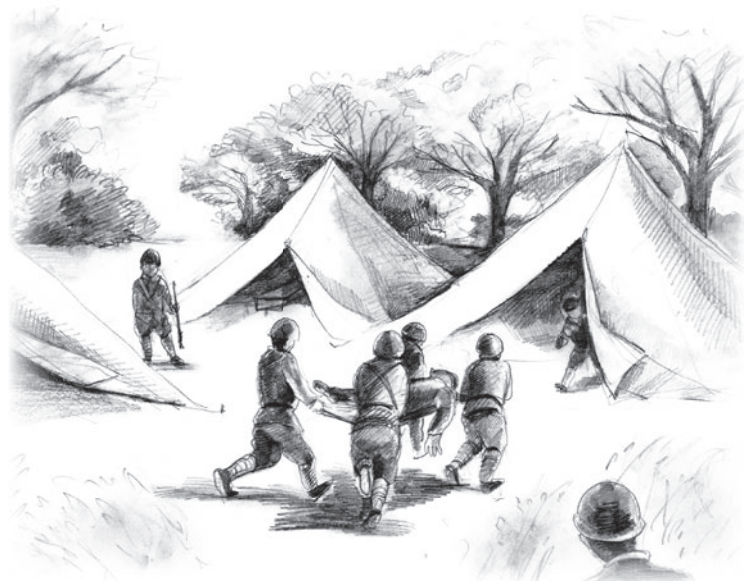
イメージ図

- 千島 表紙裏地図
- アツツ 表紙裏地図
- 玉碎たまくだ 全力で戦い、潔く死ぬこと。当時は、それが名誉・忠節を守ることとされた。
- キスカ 表紙裏地図
- ヨードチンキ ヨウ素のアルコール溶液。消毒薬に用いる。
- 野戦病院 戦場の後方につくり、負傷者や病人を治療する病院。
- 天幕 テント
- ジフテリア ジフテリア菌の飛沫伝染による感染症。主として呼吸器粘膜が冒され、粘膜細胞の壊死によって口蓋扁桃などに灰白色の偽膜が生じる。

て歩く隊がありました。担架隊は第一線もいいところで、弾が来るところに行つて、けが人を連れてくるのです。そして私たちがせいぜいヨードチンキぐらいを塗ると、担架に乗せて、今度は野戦病院に運ぶのです。

衛生隊が三つに分かれたので、その一つについて、私たちは浦河へ行きました。浦河の学校にいて、次は沼ノ端。ここでは、旭川の七師団の熊部隊が来て飛行場をつくっていました。その衛生部門を担当するのが我々です。沼ノ端では全部天幕に泊まりました。そこでジフテリアという法定伝染病の一つが出たのです。天幕の中で十五、六人が寝たり起きたりしたら、感染するのは当たり前です。それを処理するのが私たちの仕事でした。ところが、私たち衛生隊は二、三十人いたのですが、だれにも感染しなかったのです。うがい薬の一樽に嫌な薬があつて、みんなうがいをサボりたいのですが、隊長が立って、朝晩、みんながうがいをするのを自分で見ているのです。なるほど、きちんとうがいと手洗いをすれば、こういう伝染病も感染しないのだなと思ひました。よその天幕ではみんな感染しているのです。

米の飯だつて三度三度じゃないのです。十勝にいたときなどは漁労班といつて、海へ行つてアキアジを捕つてきました。朝はみそ汁、昼は焼き魚、夜もアキアジばかりで、ご飯は少ししか食べられませんでした。すると、みんな通じがなくなつてしまいました。他の軍隊もそうでした。



野戦病院にけが人を運ぶ衛生兵

イメージ図

○艦砲射撃で王子製紙の工場にドーンドーンと。

昭和二十年七月三十一日、アメリカ潜水艦より砲撃された。

○機銃掃射 機関銃などを敵をなぎ倒すように射撃すること。

○防空壕 爆弾が落ちてきたときに隠れる洞穴や地下室。

終戦のときは、苫小牧工業学校の校舎にいました。そこで初めて艦砲射撃や空襲に遭いました。私が空襲に遭ったのはそこだけです。艦砲射撃で王子製紙の工場にドーンドーンと。それが工場のほうにだんだん近づいてくるのです。バンバンバンバンと。それから、いわゆる艦載機が我々を機銃掃射しました。

ベテランの兵が「何やっているんだ、すぐ防空壕へ入れ」と叫びます。弾の下をくぐった人は違います。私たちの常識では、向こうから飛行機が来ても、まだ上に来ないから大丈夫だと思うでしょう。ところが上へ来たときは向こうに弾が飛んで行っているのです。防空壕へ走って逃げました。

その空襲から間もなく、私たちは苫小牧の近くの美々に行きました。今度は山の中に隠れたような形です。今までは敵前上陸といって、敵が海から上陸してくるところを迎え撃って入れないようにするのだと、日本中で盛んに太平洋岸を守っていたのです。でも、それではだめだ、敵は上陸してくるだろうというので、一歩下がって山の中に入って、たとえば竹槍で一人が三人やっつければよいのだと言われたのです。まるで子どもものけんかですね。日本も情けないものです。私たちは衛生隊ですから第一線に出ませんが、結局、やられるのは同じです。ずっと離れているわけはありませんから。終戦は、美々の山の中で聞きました。山の中で、上がってくる敵を一人で三人やっつければよいと言われていたので、正直言ってやっぱりほっとしました。

DATA

平成23年度中央区平和事業聞き取り

- ・平成23年8月24日
- ・中央区役所



足立憲紀(あだち・かずのり)さん

- ・大正4(1915)年生まれ
- ・札幌市中央区在住